No. 96
公民館だより
平成7年8月
宮津市字由良

由良岳・森ケ鼻道によせて(三)

館長　山下　清

夏、由良岳も麓から頂上まで一層青が深まり重厚さを増し、この炎熱に泰然として耐えているようです。

毎年夏になると思い出されるのが、太平洋戦争が終結した、私にとり忘れることの出来ない日のことです。以来半世紀、五十年の節目の年を迎えたのです。

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、その日私は前夜の空襲のため寝不足で、少々バテ気味な、暑い暑い日でした。正午、ジリジリと焼けつく炎天の中で、流れ落ちる汗を拭いながら直立で、動員先の感度の悪から流れてくる「天皇放送に聴き入っていまで知ったのですが、「界の大勢と帝国の現状に始まる長文の、「米四国に対するポツダム」「敗戦」の詔勅放送でです。ガアガアと雑音音声は聴きとりにくく内外の情報が不足がちもあり、途中から駆けには、放送内容を理解は不可能でした。

戦況が非常に緊迫しとは自覚していましたが、いずれ「神風」が吹き連合軍を撃破することだけを信じていた私達には、「敗戦」の二字は口にも出来ない言葉だったのです。

夕方になると、米軍が東京湾に上陸し交戦中だとか、デマや流言が飛び交いました。明確な情報を得ぬまま、夜おそく動員先から帰宅しましたが、混乱し昂ぶった神経が鎮まらず、不安に駆られ明け方まで寝つかれなかったことを覚えています。

明くる十六日、朝刊にて敗戦を確認しました。ふと、私達若者は皆殺されるのかなと、脳裏に閃き、身震いをしたような遠い記憶が甦ってきます。

昭和十二年から昭和二十年まで、私に残っている当時の思い出は、日常生活総てが軍事や戦争に関することばかりと言っても過言ではありません。日ごろから、大きくなったら兵隊になり、敵兵をたくさん殺し、大きな手柄を立てるのだ、と教え込まれ、素朴に夢を描いていたのです。出征する兵隊さん送りの光景は今でも鮮明に思い浮かべることが出来ます。出征兵士を先頭に、「祝出征」「祈武運長久」〇〇〇君、の幟旗をなびかせ、森ケ鼻道から由良神社へ、満開の桜並木の駅道を、高学年生徒のブラスバンドが奏でる勇ましい軍歌に合わせ合唱し、日の丸の小旗をふりながら駅頭へ。

出征兵士の挨拶は、「一位専心、軍務に精励し、皆様のご期待の万分の一にでも沿う覚悟であります。後に残った家族をよろしく」と残された言葉を、幼心に覚えています。道々兵士は何を考え、何を思いながら行進されていたのか、二度と生還出来ない覚悟が出来ていたのか、と今静かに兵士の心情を思いやり涙するのです。

万歳、万歳、歓呼の声に送られて、列車は黒煙を力強く吐きながらプラットホームを離れて行きました。私達は鉄道沿線に

並び、大きな声で万歳を叫びながら小旗が破れるまで打ち振り、列車が鉄橋を渡り出征兵士の振る旗が見えなくなるまで振り続けました。

そして、出征された多くの若者は、二度と由良川を渡り由良岳に迎えられ、にこやかに駅頭に立たれることが出来なかったのです。戦後幸いにも命長らえ生還された方々も、未帰還者を慮り、人目を避け、ひっそりと脇道から家路を急がれたことなど伺い、無念さ、虚しさに身をつまされるのです。

下石浦地区からも、十三名の若者が出征されました。戦場に立たれたのは八名の兵士でしたが、生還されたのは一名という悲惨なものでした。由良地区全体では、九十六名（福祉事務所調べ）の若い勇士が、祖国を遠く、戦陣の露と消えられたのです。

お盆や、お彼岸の墓参の砌、戦死者の墓前に額ずき、碑銘に刻まれている、享年二十二歳、二十三歳、……と読み上げながら、生存されておればと指折り数え、在りし日を偲びながら、ご遺族のご苦労、ご無念を思い起こさずにはいられません。

戦陣に倒れ、戦禍の犠牲となられた、幾多の尊い命を代償に、戦争は終結しました。その昔、唐の詩人は、「国破れて山河あり」と悲惨な戦争を怒り、悲しみの詩をうたいましたが、太平洋戦争の終末の光景は、筆舌では表現出来ない悲惨なものでした。

破壊され焦土と化した国土、疲弊した故郷、肉親を失い、衣食なく、住む家もない、疲れ果てた国民だけが残されたのです。

以来五十年、幸いにも命長らえ、戦後の混乱期を乗り越え、みんなの手で泰平の世を掴むことが出来ました。戦中、「日本国」が関係諸国に対し犯した、不法で非人道的な行動、軍隊が犯した残虐な行為に思いをよせ、正しく認識し、あの戦争は何だったのかと平和の意義を考え、平和の大切さを語り合い、今日の平和をしっかりと守り抜き、次代に引き継ぐのが私達の責務であると思います。

ああ子らの歓呼の声や旗の波
出立つ兵士の振る旗遠く

清海人

平成七年度
由良地区公民館役員名簿

運営審議会委員
（順不同、敬称略）

由良小学校長　梅垣勝彦
脇自治会長　土岐卓吉
宮本自治会長　中西孫兵衛
浜野路自治会長　中西俊夫
港自治会長　藤本修
下石浦自治会長　桝田康秀
上石浦自治会長　山下弘
市議会議員　山下伊左衛門
前公民館館長　小室哲寛

学識経験者　四方寿朗
由良小学校育友会会長　有本敬
栗田中学校育友会副会長　大森章弘
婦人会長　川崎美幸
老友会長　中西吉之助
子供会連絡協議会会長　瀬田吉雄

〔職員〕
公民館長　山下清一

主事　酒田　治

〔分館長〕

脇分館長　中西　衛

宮本分館長　山口正憲

浜野路分館長　中西英貴

港分館長　森川耕一郎

下石浦分館長　山下一郎

上石浦分館長　岸田秀樹

〔幹事〕

（文化部）部長　岸田国彦

副部長　北野隆雄

土岐正徳　田原　学

由利昭弘　糸井治孝

中西夏江　大畑忠夫

新宮鶴雄　山下浩二

藤井陽子　塩田禮子

上田このみ

（体育部）部長　中西隆光

副部長　森田耕二

〃　小田原道子

小室秀雄　由利典久

浜崎利雄　浜崎智美

中西一孝　玉垣光紹

瀬田直子　川崎清春

酒本文子　蒲原順一

山下正貴　藤本光代

川崎美幸　小田原昭子

（体育部）小室文雄　北野　薫

岸田美保子　岸田　剛　玉垣泰子

〔講師〕

（文化部）中西俊夫

平成七年度　由良地区公民館事業計画

〔体育部〕

・由良岳登山　四月二十九日

・宮津市地区対抗駅伝競争大会　六月四日

・地区対抗女子キックベースボール大会（ナイター）六月十日

・職域対抗ソフトボール大会（ナイター）　六月十一日

・みやづビーチバレー'95　七月二十三日

・球技大会（野球、ソフト）　八月十四日

・区民運動会　九月三日

・区民フィットネス交流会　十月十五日

・第二十五回宮津市市民駅伝競争大会　十一月三日

・第十七回宮津市婦人バレーボール大会　十一月十二日

・第十三回市民卓球大会　十一月二十六日

・四部対抗男女バレーボール大会　二月四日

〔文化部〕

・盆踊り大会　八月十四日

・文化祭（婦人会と協賛）　十一月五日

・同和学習会　一月二十一日

・区民囲碁大会　二月四日

・自治学級　二月十一日

・生涯学習講演会（婦人会と共済）　二月二十五日

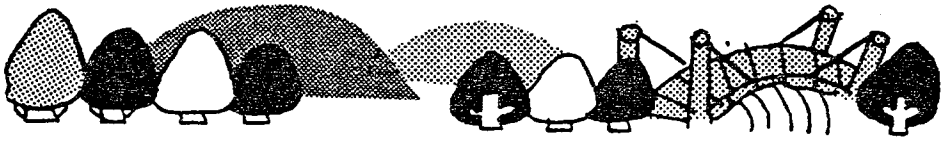
・生涯学習講演会（高齢化社会懇談会）　年一回

・まちづくり座談会（各地区分館）　年一回

・歴史の館ネットワーク事業（歴史をさぐる会）　毎月十日

・公民館だより発刊　四、八、十二月

・文化財保存会　随時



行事報告

主事　酒田　治

●由良岳登山

四月二十九日（日）

週末よりの悪天候で、どうなるかと心配された天気も、登山前日よりやや回復し、当日は上々の登山日和となりました。

由良岳!!　由良に住んで毎日眺めているのに、青年時代、青年会で登って四十何年振り……。登山道より、官行造林の大きく逞しく育った杉林の中を、一杯水で咽をうるおし、急斜面を頂上へと登る道々、雪のためおそくなったのか、こぶしの白く可憐な花びらが、そよ風と共に、疲れた体を快く迎えてくれます。頂上は汗を吹き飛ばす冷たい風が心地良く、三百六十度のパノラマは何ともいいようのない素晴しい眺めに、来て良かったなあーと思いました。今年は観光協会の方々に由良岳の西の嶺に通じる山道を開けていただき、西の嶺より見る天橋立は又格別な眺めでした。

次回由良岳に登られる方は、是非西の嶺にも足を運んで下さい。なお、当日の為、登山道道作りをお世話になった観光協会の方々、子供達の為に毎年お菓子を寄贈下さった松原寺様に厚くお礼申し上げます。

おわりに、登山に参加の皆様、お疲れさまでした。来年も、友達等お誘いの上、是非参加をお願いします。

●第七回宮津市地区対抗駅伝競争大会

由良小学校を出発点とした南部コースと、日ケ谷を出発点とした北部コースで、十二地区の百六十八人の選手が十時三十分にスタート、宮津市を駆け、ゴールの市民体育館を目指すレースが展開されました。

由良地区チームも大会に備え練習を重ねてきました。

南部コース（七区）で新宮鶴雄さん、北部コース（三区）で泉晶雄さんが区間賞を取られる等、選手の皆さんが健闘されましたが、残念ながら僅差で総合五位の成績で、事故もなく終了することが出来ました。

選手の皆さんは大会に備え連日トレーニングを積んでいただき、ご家族の方には温かなご理解を得、地区の皆さん、安全協会、消防団はじめ、多数の方々のご協力、ご声援を受けたことを厚くお礼申し上げます。

総合優勝　府中地区

二位　養老地区　三位　日置地区
四位　栗田地区　五位　由良地区

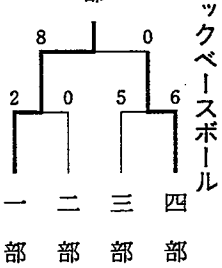
●四部対抗女子キックベースボール

六月十日（土）

四部対抗女子キックベースボール大会を行いました。昨年まで四回はソフトを行って来ましたが、本年は何か違った方法でということで試合を行いました。今までと違って、バットが足蹴りに変わり、ボールがサッカーボール。力一杯蹴っても、何々、飛ばないところがミソ。とても賑やかなナイターでした。

女子キックベースボール

優勝一部



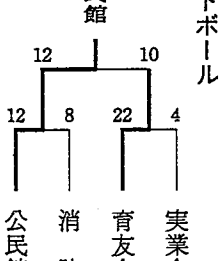
●職域対抗ソフトボール

六月十一日（日）

職域対抗ソフトボールを行いました。昨年優勝を逸した公民館チームが優勝し、和やかに終了しました。

ソフトボール

優勝公民館



ナマズの赤ちゃん

由良小学校長　梅垣勝彦

「宮津市立由良小学校でナマズの卵の孵化に成功」。理科室の水槽の中で誕生したナマズの赤ちゃんは、その可愛い写真とともに京都新聞、読売テレビで紹介され、地域の話題となりました。

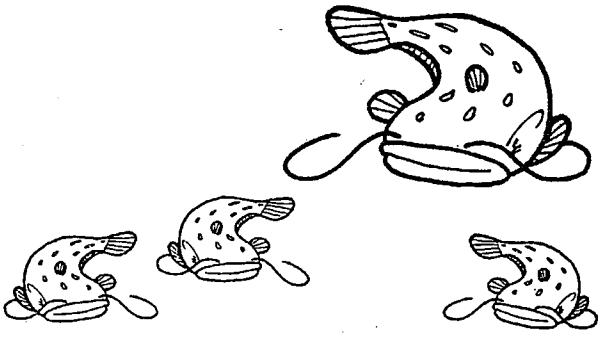
小さい頃から近くの山川で魚とり、虫とりと元気に遊んでいた、六年生の中西くん、岸田くん、足立くん達は、毎年春になると、大きなお腹をしたナマズやフナが、学校近くの小川によくいることを知っていました。そして、自分達の手で卵を孵化させ、育ててみたいという夢を持っていたのです。

身近な自然にたいする旺盛な好奇心、興味、鋭い観察力が、「小学校でナマズを卵から育てるのはあまりないケース」を実現させたといえます。

今日、学校教育の重要な課題として、国際理解教育とともに環境教育があげられています。環境教育とは、身近な環境に関心をもち、人間と環境とのかかわりについて理解を深め、環境に配慮した生活や行動ができる態度の育成をめざす教育です。

本校が位置する由良地区は地方色豊かな文化、民間伝承と美しい自然に恵まれています。泥んこになって魚とり等に興ずる、元気な自然っ子がいます。自分達の住む地域をよく知りたい、我が子に教えたいと、中西夏江先生の「山椒太夫そして由良の山、川、海」のお話に熱心に耳を傾けていた、多くのお母さん達がおられます。

こうした素晴しさを大切に結びつけ、特色ある環境教育を是非創造していきたい、子ども達の地域を見つめる目、郷土への愛着心、自然に親しむ心や態度を養っていきたいと思います。



公民館より

◎図書寄贈のお礼

○中西夏江氏より「一つ星」・「丹後のきゃあ餅」　一～三巻　三冊

○小西平右衛門氏より　毎月　四冊～五冊

平成七年六月をもって、六百二十四冊の寄贈を受け、終了となりました。長い間ありがとうございました。

◎新刊本購入

「顔面麻痺」「お役所の掟」「京都影の権力者たち」「虹の岬」「八代将軍吉宗（上）」「もう君達は頼まない」「深い河」「生きるよろこびのヒント」「阪神大震災全記録」「西丹波秘境の旅」「戦後五十年」「舞鶴、宮津、丹後の百年」

◎訂正おわび

前号（第九十五号）十二頁　浅春　四首目

（誤）沈丁花増す朝に亡き友の

（正）沈丁花蕾（つぼみ）増す朝に亡き友の

プラス志向で

川崎美幸

地震、サリンと大変な災害や事件がおきていますが、こんな時だからこそ、地域の人のつながり、助け合いの大切さを改めて考えさせられます。

私も今年は会長という大役を仰せ付かり、私に務まるだろうかと不安で溜息ばかりついていましたが、これでは前に進まず、プラス志向で考えれば少し楽になれるのでは……。

色々と行事等もあり大変忙しい毎日ですが、職場や家族の理解、協力のもとに楽しく勉強し、人との出会いを大切に、一年間やっていきたいと思っています。

出る事により多くの人と知り合い、色々の人の考えを聞かせてもらう中で、大変貴重な経験をさせてもらえるのではないでしょうか。

最近女性の社会参加から参画へと言われていますが、就業婦人が大半を占めるこの頃、色々の行事や勉強の場があっても、なかなか思うように参加できませんが、時間の許す限り、あらゆる物に興味を持って、まず参加して下さい。必ず何か得るものがあると思います。面倒やなあと思う前に、ちょっと考え方を変え、何かいい事があると思って参加して下さい。

私も、今年一年、プラス志向で楽しみながらやっていこうと思います。そして、任期が終わった時、充実したよい一年であったと思えるよう、私なりに努力したいと思っています。

会員の皆様、地域の皆様のご協力、よろしくお願いします。

子供会、頑張っています

瀬田吉雄

自治連合会、各団体、子供会会員、役員の皆様方には、常日頃より由良子供会活動に多大なるご支援、ご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、本年度連絡協議会会長を任せられましたが、各地区優秀な方々がおられる中、今年は浜の路の順番という事で、無力ではございますが引き受けた次第です。

まず、受けてみて大変と痛感。宮津市青少年連絡協議会での多くの役員会、由良各協議会役員会、又、この夏休みに向かっての協議及び地区長会など多忙であるが、子供会各役員さん達の協力のもと、前会長さん及び先輩方の指導をいただき、何とか行事を消化出来ている次第です。又、各地区役員さん方、幼小中と各学校の役員も兼ねており、仕事を中心として何かとご苦労様です。その中で、各地区会長さんは宮津市子供会推進委員を市長から任ぜられ、子供達の活性化をねらって活動をしていますが、教育委員会の先生方の話の中にも、やろうと思う事はいくらでもあるが現実は出来ない事が多く、地道に頑張ってみてはとの、色々と子供会活動の話を聞かせてもらいました。

由良子供会活動は、宮津地区にくらべて、昔から活発であるとの事です。これからも宮津青少年協議会の行事等いくつかありますが、由良地区も夏休みを含め秋祭りなど多くの行事に向かって、役員一同子供達と楽しく遊んで行きますので、各皆様方のご指導ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

子供の教育について

由良幼少ＰＴＡ会長　有本　敬

日頃は、地域の皆様方には子供達に対しまして、暖かく「おはよう」、「おかえり」等、地域ぐるみで挨拶の声かけをいただいております事に対しまして厚く御礼申し上げます。

ＰＴＡに於きましても、母親委員会の方々により、挨拶運動に取り組んでいただいておりますので、これからも引き続き挨拶の言葉を子供達にかけていただきますよう、宜しくお願いします。

「銀も金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも」と万葉の歌人が詠まれたように、親が自分の子供を愛し、将来に幸あれと願う心は、千年以上前の親と同じように思います。

しかしながら、子供を愛する余り、我が子には甘くなる事が、私自身あるように思います。

子供のしつけは、家庭で責任を持ち、他人に迷惑をかけない、思いやりのある子に育てていく事が必要かと思います。

小さい時のしつけが子供の人格形成に影響を与える事を考えると、子供の将来のためにも、家庭で今一度考える必要があると思います。

家庭の外では、大人の社会と同じく、子供もそれぞれの発達の段階に応じ、疑似社会的な営みをおこなっております。

例えば、児童会では、子供自身が主体性を持ち物事を決定する経験を積んでいき、集団生活のルールを少しずつ学習し、身につけるようになっています。

子供にしっかりとした、しつけをし、子供が集団生活の中に溶け込みながら少しずつ自分の個性を伸ばす事ができるようにする事が、親である私達の責務であると思っています。

キックベースボールに参加して

森野　真由美

ライトアップされたグランド。在学当時とは少し模様替えをしたグランド。とっても広く写っていたのに、今では〝こんなに狭かったっけ？〟なんて思ってしまうグランド。その中で緑の森だけは今も昔も変わらず大きな存在感を占めています。とても懐かしい思いが込み上げてきて、少々、タイムスリップ。

けれども、懐かしさにひたっている場合ではありません。運動不足の私が、初体験のキックベースボールができるのか、とても不安です。そうしている間に、試合開始のホイッスル。とにかく足引っぱりをしないようにと思い、試合に臨みました。

結果はまず一勝。予想外だったので感激でした。次は決勝戦です。チームの士気も盛り上がり、イケイケムードです。

そして、なんと決勝戦も大量点で勝利してしまいました。大きな声援がチームを勝利へと導いたのでしょうか。大感激でした。

ホームベースをふみ、大きな声援でチームに迎えてもらう。とてもさわやかな一瞬です。スポーツならではの味わいではないでしょうか。

公民館行事としても、キックベースボールは初めての試みだということでしたが、このような新種のスポーツを体験でき、

又、優勝もでき、とてもすがすがしい汗を流した一日でした。

But、翌日は予想通りの筋肉痛。日頃の運動不足が身にしみました。

由良岳登山

谷口玉江

由良岳頂上には、虚空蔵菩薩がお祀りしてあり、如意寺の「奥の院」となっています。

昭和二十三年（一九四八年）に、私は如意寺の谷口住職の許へ嫁いで来ましたが、以来、虚空蔵さんのご縁日の三月十三日（如意寺の年中行事の一つ、虚空蔵祭）には――天候によって一、二日はずれたりしたこともありました――由良岳に登って、お参り、お勤めを続けて今日に至っております。

当時は、近所の子供さん達と一緒に登山しておりましたが、お寺参りに来られる年配女性の方達も、時には山菜摘みの楽しみもあったりしてだんだんに人数も増え、十年程続きましたでしょうか、皆さんご一緒に頂上の風に吹かれながら、爽やかな読経も続けられたりいたしました。

お勤めは、供物（くもつ）をした上で、「心経、虚空蔵真言、光明真言、大師宝号」を唱え、最後に回向（えこう）文を誦読します。心身共に清浄感に包まれながら立ち上がりますと、眼下に広がる日本海や、遠方に聳える山々の眺望は誠に壮大で、生きている幸せと、生かされていることへの感謝をかみしめずにはいられません。

如意寺の先代は昭和十六年（一九四一年）に他界しておりますが、現住職が、子供の時から足の悪かった先代と共に登山し（当時、どなたかに供物など携行して頂き）、看経を続けていたということです。

戦時中、住職は学徒動員（高野山大学在学中）で出征、二年間は留守で、その間、姑が寺を守り、幼稚園並びに研修所（兵隊検査で乙種、丙種の人達の訓練所となり、防空壕掘り等＝西山には今も家門まで突き抜けた壕が残る）になったりしていたということで、いきおいその何年かは由良岳登山も、勧行することも出来なかった模様です。

往昔から、由良岳登山には「十三参り」という風習がありましたそうで、男子なら十五歳で元服、女子がその年令に相応する十三歳の旧暦三月十三日（漸次四月十三日）に、福徳、知恵、音声を授かる為に虚空蔵さんに参詣するということで登ったといわれています。その時に麓から石を持参して登り、青葉山の高さに負けまいと石を積みましたとかで、今も頂上に数多の石が堆く積み上げられています。

公民館主催の由良岳登山が行われるようになってからは、子供さん達や大人の方々の登山も大勢になりました。毎年四月二十九日（雨天の時は五月三日）には、由良岳も虚空蔵さんも登山者の声々に賑わい、その明るさは眩しいばかりです。十年程前までは住職共々お勤めしておりましたが、この頃は私のみ皆様方とお参りさせて頂き、いつ

も犬が同道して愛嬌を添えています。

終りになりましたが、毎年由良岳登山道をきれいに整備して下さっています「天橋立観光協会由良支部」の皆様に心から厚く御礼申し上げ、これからも由良岳登山が益々盛んになりますようにと念じております。

合　掌

第七回宮津市地区対抗駅伝競争大会に参加して

岸田　祐佳

今日から駅伝練習の始まりです。楽しみなのと、不安で、時間がきたら行かなと、あせる毎晩でした。練習はきついのか、どうなんだろうと心配していました。中頃の練習より、最初の練習がきつかったです。津田さんや、千阪さん、森田さん、林さんたちが、コーチとなって走り方を教えてくれました。公民館の山下さんや酒田さんが、毎晩おうえんしてくれました。何日か来ると、最初は楽しみだった練習も、

「もう今日はえらい」

と、いやになってきました。

「今日は一キロ計る」

「今日は三キロで終わり」

と言われたら、

「エー」

とは言ったけど、毎晩かかさず練習に行きました。つかれても、夜、友達と会うのも楽しかったです。晩ご飯は食べすぎると走れないので、ちょっとつまむくらいで、行きました。おなかがすいているときは、いっぱい食べたかったけれど、がまんしました。帰ってきても、つかれて食べる気がしませんでしたが、食べないと体力がつかないので、無理して食べました。おふろへ入って、宿題をして、毎晩ねるのがおそくなりました。同じ練習している友達もえらいやろな、私もがんばろと思いました。

当日、ドキドキするなか、ウォーミングアップをして、二区の磯田さんの走ってくるのをまちました。そして、タスキをもらって、一生懸命走りました。三区は、栗田の脇公民館から区民センターまでです。栗田の人も、

「由良ガンバレ」

と、大きな声で応えんしてくれて、うれしかったです。そして、私は一人ぬかしました。えらいなと思っていると、お父さんが、

「ガンバレ」

と声をかけてくれました。しばらく行くと、お母さんと秀章がいて、

「もうちょっとや、ガンバんな」

「お姉ちゃん、がんばれ」

と、秀章の声がよく聞こえた。そこから、ラストスパートをすると、こんどは、浜中先生と美香が、

「ガンバレ」

と応えんしてくれて、四区の津田のおっちゃんにタスキをわたして、私はつかれきって、区民センターの前でジュースをもらい、しゃがみこんでしまいました。好きなジュースも、飲めませんでした。タイムは試走のときよりわるいので、なぜかなと思いました。

全体で、由良地区の南部は六位でした。体育館でも、たくさんの人たちが応えんしてくれていました。たきこみご飯、おうどん、パン、いろいろ準備をしてくださって、私もえらかったけど、みなさんも大変だったと思います。今年は、小学校最後の駅伝だったのに区間賞がとれなくて残念でした。今度走るときは、区間賞をとるくらいがんばりたいです。

第七回宮津市地区対抗駅伝競争大会に参加して

岸田成史

十時半に第一区が出発し、僕は、上宮津八区で待ちました。待つ時間は、今何位を走っているだろうかとか、今どの辺を走っているだろうかなどの気持ばかりで、待ちどおしかったです。いよいよ一位の選手が遠くに見えてきた。二位、三位と八区の他の選手にたすきが渡された。由良はまだかなあ。来た、五位だ。六位と同時くらいにたすきをもらった瞬間、たすきが選手の汗でびしょびしょにぬれていることに気がつきました。この汗は、七区まで頑張った選手の汗だ。ぼくも、頑張って汗を流して走る意気込みがでてきました。

練習はつらかった。学校に行っても疲れたし、かぜもひいた。でも今は本番、今日で終りです。みんな応援してくれている。由良のために走ろうと心がけました。少しでもタイムを縮めたい一心で走った。一人ぬいた、差もあけたと思ったが、府中の五年の選手にぬかされた。くやしかったが、ぼくも限界でした。九区へ、また五位で、汗でぬれたたすきをわたした。

やったあ！　いっぺんにすがすがしい気持ちになって、汗もだんだんひいてきた。気持も落ち着いてきた。僕の区間のタイムも五位でした。いい思い出にもなり、これからも何ごとも一生懸命努力して挑戦していきたいです。

「蜂子皇子船出之地」の碑建立に思う

由良の歴史をさぐる会　四方寿朗

私たちは去る四月、照国神社境内に、港地区のお許しを得て、「蜂子皇子船出之地」の碑を建立しました。昭和五十四年以来蜂子皇子の伝説を縁に、同じ日本海沿岸の郷庄内由良との友好の記念にと考えたからです。これまでに小学校児童を含め、それぞれ二回ずつ訪問団を派遣して、交流を深めて来ました。

丹後にはたくさんの伝説があります。即ち伊根の浦島太郎、網野の羽衣伝説、大江山の酒呑童子、そして由良の山庄大夫伝説などです。その内容は、殺人、自殺、誘拐、拉致監禁、いじめ等、現在世間を賑わしている多くの事件と同じです。伝説は史実ではありません。しかし、今日まで永い年月絶えることなく人々に語り継がれて来たのは、伝説の中の喜び、悲しみ、怒り、希望、夢などが庶民の共感を得たからだと思います。我々は、これらの伝説の中から昔の人々の思いや生活を学び取り、広い視野と歴史的な展望に立って、今後のふるさとづくりを考えたいと思います。

又、当由良地区には、この外にも多くの石碑があります。脇の加茂季鷹の由良の戸の碑、澤井市造翁の胸像、森鷗外の文学碑、由良神社境内の新宮涼庭顕彰碑、里センター前の上田三四二氏の歌碑、山庄大夫屋敷跡の碑などです。我々は、建てられた人々の心に思いを致し、郷土の貴重な文化財として大切に守り、故人の志を、後輩たちに正しく伝えて行かなければならないと思います。

戦後五十年

玉垣　まき

一生に忘るまじきは夫戦死公報昭和二十三年五月

死亡月日は昭和二十一年十月十五日と記されていますので、亡くなってから二年経って公報が来たことになります。当時は、ひょっこり帰って来られる方もありましたので信じませんでした。

いり豆に花ということあるやとも九年延ばせし夫の葬送

夫の戦死公報の来たことを舅に言えません。舅は、毎日、新聞を見ては、復員船が入港するから帰って来るだろうと、何度も言っていましたが、帰って来ないのでがっかりしている様子がうかがわれました。

そんな日々を重ねながら、公報の来た昭和二十三年八月十六日に舅は亡くなりました。随分気を落として、よくうなだれていた当時の様子が思い出されます。

私も一度、平桟橋に行ってみようと、子供達を学校へ出した後、主人の名を書いた襷を肩からかけて復員者を迎えましたが、誰一人として、主人の事を知っている人はなく諦めて帰りました。

夫の葬式は、なかなか信じられないことと、子供が小さい間は何かと大変で、上の子供達が成人してから、やっと九年目に出すことが出来ました。

今年は戦後五十年で、方々で追悼の行事が行われています。主人に召集令状が来ましたのは、昭和二十年四月五日でした。以後五十年間の生活を振り返ります時、断腸の思いがこみ上げて参ります。

家族八人、上の子供は十五歳頭に、生後四か月の乳児を残して征くのですから真剣です。主人は口数少ない方でしたが、出征の前夜、「三年経てば帰ってくるから頑張ってくれ」。そしてまた、「三年なんか、すぐ経ってしまう。その他は便りするから――」とも言いました。舅と子供六人を、私の手に委ねて征かねばならないゆえに、私を励ますつもりで言ったのだと思います。

忘れじとあの温もりや胸ふかく手をさし入れて永久の訣れす

六月頃までは、子供達の事に多くふれた軍事郵便が届きました。色々と心配したり、想像したりしている主人の様子が感じられました。その胸中は、察するに余りあるものでした。

やがて終戦となり、一縷の望みを抱き続けましたが、初めに書きましたように公報が来ました。戦病死でした。

当時、長男は大学へ入学したばかりでしたが、下に弟妹が大勢いることゆえ、中退をさせました。当人も私も泣きました。

子供六人を抱えての生活は筆舌に尽し難いものでした。父親がいないということは、子供の教育をはじめ、色んな場面で大きな障害となりました。

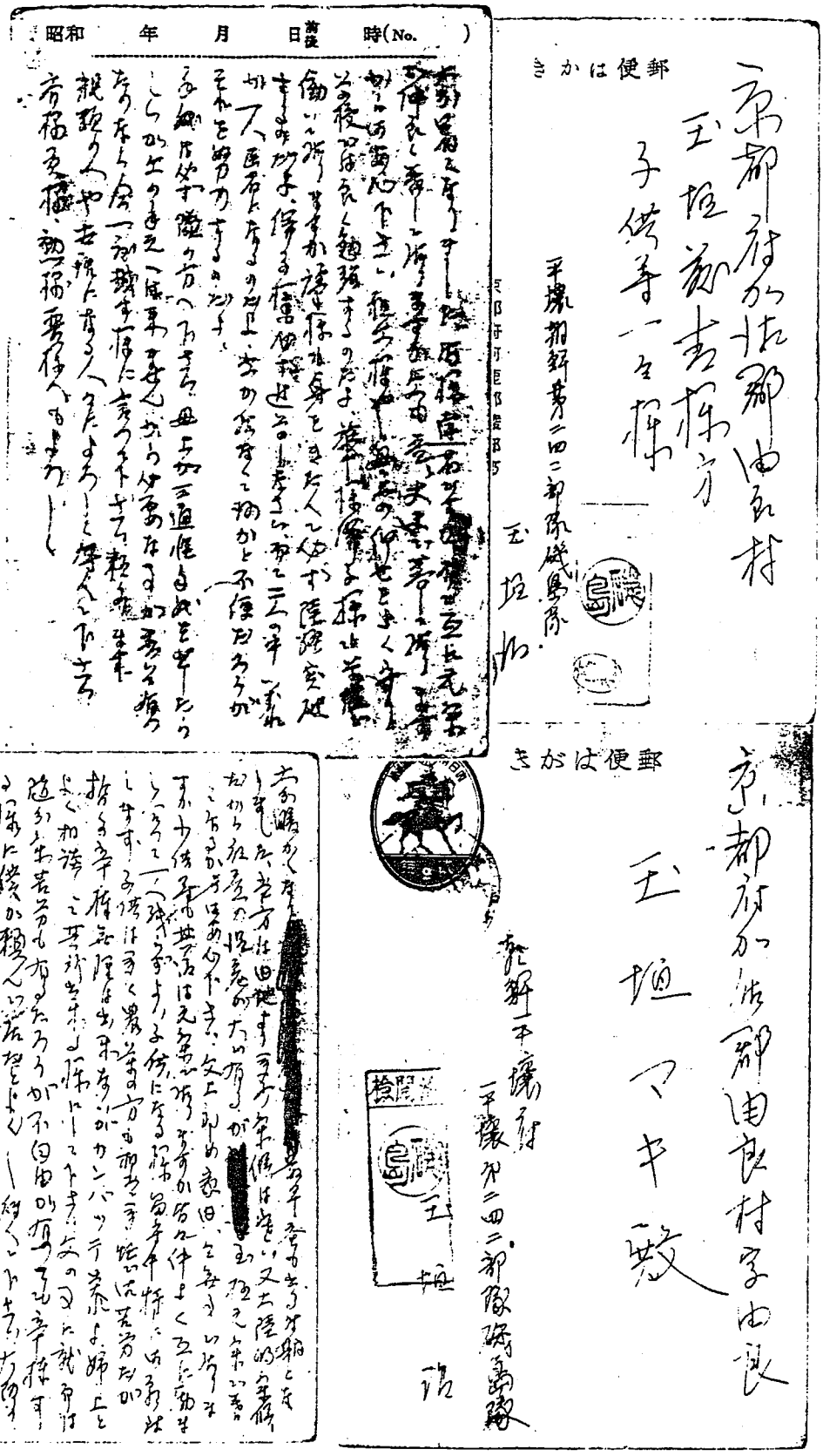
現在、子供達も成人してそれぞれ家庭をもち（昭和六十一年長男死亡）、私自身、一人暮らしながら平穏な日々を過ごしています。これも多くの方々の支えがあってのことと感謝しております。

私と同時代に生きた人々は、皆さんそれぞれに戦争の悲惨さ、残酷さを経験され、私よりもっと大きな苦難の生活をなさった方もいらっしゃると思います。このことを風化させないよう後世に伝え、二度と再び戦争がくり返されることのないようにと祈らずにはおられません。

子供達はよく言いました。

―お父さんを

返してください ―と。



現在も、玉垣まき様の手許に大切に保存されている軍事郵便です。左下のはがき文面に四か所黒く抹消されていますが、これは検閲の際、係官が抹消したもの――ということです。

若き日の追憶

西之上　熊吉

戦後五十年を迎え、平和と自由の日本で生活を送ることが出来る私ですが、少年から青年にかけての約十年の青春期は、戦時色の強い教育体制の中で育ちました。

同年代の若者の頭の中には、二十歳以後の生活設計を立てる余裕はなかったものと思います。

私は小学六年生から京城に住んでいました関係で、人種的問題に敏感な外地で日常の制約が激しかった事を覚えております。

学生歴九年、軍歴三年十か月（羅南部隊六か月、関東軍石頭予備士官学校四か月、シベリア抑留三年）と、波乱に富んだ人生の一こまを過ごしました。時折、当時の生き様が走馬燈の如く脳裡をかすめることがありますが、苦労もいつしか懐かしい思い出と化しつつあるような気がします。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」との諺がありますが、誠に妙を得ている感がします。

ところで、私は戦争について論ずる程の知識才能もない凡人ですが、世界史を観る限り、古代より人間は、洋の東西を問わず、戦争の足跡を沢山残しながら現代に至っております。百年戦争という記録はあっても、百年平和という言動を見聞した事はありません。今でも、銃声が聞え、人々が犠牲になっている地域があり、本当に人間世界に恒久平和を築くことが可能なのか？　と考えこんでしまいます。

かつて我が国でも、現実離れをし、夢を喰って五十年頑張った獏集団がいましたが、やっと目覚め始め、現実的平和づくりに努力しつつあるようで結構なことと思います。

国の存亡を賭けた大戦争跡も次第に風化し、歴史の頁として残ることでしょう。私は短期の実戦経験者ですが、絶対に忘れ得ない事実を述べたいと思います。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は、大量の重戦車を先頭に満州各所の国境線を突破し、南へ急進。我が候補生隊も徹夜行軍で液河の丘陵地に布陣しましたが、他の砲兵隊も砲数が少なく、戦闘は、爆薬を抱え戦車に飛び込む戦術が主軸で、若き候補生達は〝神風突撃隊〟として散華していきました。

戦闘状況を双眼鏡で確認する役の私は、じっと見詰める勇気がなく、半狂乱の状態であったことを覚えています。運命の分かれ道とはこの事か、私は本部指揮班要員となった為、生き長らえていますが、思いは実に複雑です。「岸壁の母」でご承知の端野候補生も、この時の一員でした。母親の気持を察する時、涙せざるを得ません。

戦闘は装備の差が大きく、玉砕直前に撤退命令が発令、自爆用手榴弾二個の配分を受け、南へと必死に敗走する中、奥地から命からがら逃げて来た開拓団の婦女子と合流し、救援を求める人々を見向きもせず放置せざるを得なかった薄情さ――。後日、満州戦災孤児を見る時、感情の高ぶりを覚えずにはいられませんでした。

最終防衛陣地横道河子へやっと着いた所、疲労しきった将兵の集りは、戦闘能力もない騒然とした状態で、食糧もなく、満人の畑から各個にとうもろこしや南瓜等を盗み、生で食べていましたが、ソ連軍が来れば〝最後〟を覚悟していました。

そんな二日程を過ぎた時、憲兵の腕章をつけた兵隊がやって来て「十五日に終戦になりまし

た。道路付近に出て、武装解除を受けるように」との指示があった時は、安堵感と空虚感が交錯し、お先真っ暗になりました。

間もなくソ連軍が続々と到着し、軍装は勿論のこと、時計、万年筆まで取られ、心の内で「馬鹿野郎」と叫んではみたものの、ささやかな抵抗に過ぎません。結局、捕虜として、シベリアで辛酸をなめる結果となりました。

筆を擱くに当たり、日本丸の安全航行を熱望する次第です。

タイムスリップ五十年

松林春吉

一九四五年（昭和二十年）六月上旬、舞鶴海軍防備隊で、若狭本郷小学校（大飯町）を宿舎として、設営隊浦上隊が結成された。

隊員は、年令十六、七才の甲種飛行予科練習生及び、四十才前後の階級章のない応召一か月に満たない方々、総勢約百数十名が、体育館並びに工作室等々に分宿する。

私達救護班は、図書室の一部を借り、治療室及び寝所とした。班長は、大正十年兵（大正十年海軍に入団）応召の老兵曹である。私も横浜の戸塚海軍衛生学校を卒業一年余り、他の二名は鎮海海兵団を出て一か月の特別志願兵である。

作戦内容は、毎日本郷より対岸の大島に渡船で渡り、防空壕掘りの重労働である。休日は、強風の為に渡船運航不可の場合に限られていたように思う。私達は、一名又は二名が、隊員と共に乗船現場救護所に配置につく。

若狭に来て二か月、あの八月十五日が来た。校長先生の計らいで、ラジオの前に立つ。やがて陛下の玉音が、雑音の中から我が耳に飛び込む。上を見る者、横、又、下を見ている者。そして出て来る言葉は、異口同音に「あ、ああ……、負けた」であった。

呆然として二、三日が過ぎた頃、原隊より班長に呼び出しが来る。班長帰隊直後二名を呼び、明日にでも復員とのことで旅費を渡す。二名は、喜々として郷里の話に花を咲かす。

二十日頃には、総て復員。私達も原隊に帰る。そこで見たものは、話題の浮島丸の犠牲者を荼毘（ダビ）に付す光景である。三、四日続いたように思う。

八月も終りに近づく頃には、多くの人達が復員した。その頃私は、舞鶴海軍病院（国立病院）の裏山の防空壕より、医療器材及び薬品類を同僚と共に搬出していた。

九月三日午後三時頃、呼び出しがあり、飛んでいくと、分隊士より境港港湾警備隊（サカイミナトコウワン）への転勤命令である。先任下士官より旅費を受け、警備隊の所在を聞くが、当人も知らない。止むを得ず人事部（日立造船労働組合事務所）に問い合わせたところ、鳥取県境港で掃海隊編成中との事で一安心。早速準備にかかり、七日の昼食をすませて東舞鶴駅へ。

待合室及び駅前広場に、多くの復員者が列車待ちをしている。

乗車券は、便箋半分程の用紙に必要事項を記入、その場限りの切符である。三時頃の下りの列車に乗車。乗り継ぎ、乗り換え、ようやく鳥取駅に到着。列車は鳥取止まり。時刻はまだ八時過ぎ、連絡は明朝七時頃、米子行きが出る予定との事。

待合室には、紙を敷き寝転んでいる人、荷物に腰をおろしている人、人又人々で混雑そのものである。駅前広場も又然り。

私も衣嚢（イノウ）（自分の被服を入れた袋）にもたれ夜明けを待った。ふと、変な気になる――「多くの人達は復員するのに、なぜ自分一人が転勤なんだ」――淋しい気持ちになる。

明けて八日十一時過ぎ、境港に到着。駅前付近一帯は焼け野が原だ。十五分程で警備隊に到着。転勤の報告をすませ、掃海隊の勤務についた。医務科には軍医長一人であり、私が配置につくまでは、徴兵で兵役に服するまで薬局勤めの経験者が勤務していた。数日後、二人の転勤者があり、軍医長以下三名の医務科が出来た。

掃海は、鳥取、美保、松江方面の海上に、米軍のB29が投下した機雷の後始末である。

警備隊の勤務も一年余り、喜怒哀楽を胸に昭和二十一年十月復員、故郷の土を踏む。この時が、現在に連なる第二の人生の始まりである。

戦後五十年を経てこの頃思うこと

岸田　六右衛門

戦に敗れ五十年が経ちました。戦中、戦後の生活は今の私達の生活からはとても考えられません。僅かな食糧で家畜の餌のようなものを食べ、家は焼かれて住む所もなく、衣服はボロボロで、いつになったら生活が良くなるのか、不安一杯の生活でした。

あれから五十年、今では世界中から物資が殆ど日本へ集まり、物が溢れて贅沢な生活が続けられています。

国民の生活が向上することは、国民みんなの弛（たゆ）まざる努力の結果で、非常に喜ばしい事ではありますが、世界にはまだまだ貧困で困っている人々や、まともな食生活も出来ず、教育も受けられない子供達も数多くあります。

今世界では年間、日本の農地面積を上回る六百万ヘクタールの農地が、砂漠化し荒廃していますし、中国では五年後に年間、一人二百個の卵を食べる為の計画がたてられていますが、十三億の人口を考えても、膨大な穀物の消費となり、世界の穀物相場を一変させる事になると思われます。

食料一つ考えてみても、毎年一・七パーセントずつの人口増加や、発展途上国の生活向上等を考える時、決して日本もいつまでも安泰であるとは考えられません。一次産業の重要さを認識して、せめて自家消費の米や野菜くらいは生産するという心構えをすべき時期に来ていると思われます。

次に、最近の世相をみても、暴走族に注意した人が殺された

り、オウム真理教のように宗教の名の下に無差別の大量殺人が計画、実行されたりという憂うべき事件が報道されていますが、特にオウムについては、将来日本を背負ってたつべき有能な青年で知性も教養もある筈の者が、なぜこのような犯罪に走ったかという事は、到底私達には理解出来ません。

宗教は幸福な人間生活の為にあるものだと言われますが、私は、人間がこの世で生身の生活をしていく為に色々とぶつかる問題、障害にどう対処して行くか、その最善策を身に付ける為に必要であると思っております。死後天国へ行くためでも、死者の霊を弔うためでもなく、個人個人が現世を人間らしく、どう生きるかが一番大切である筈です。

オウムの被告達は優れた知識はあっても、人間としての知恵が欠け、道を踏み外したのだと思います。

戦時中、私達は人を殺す事（戦争の名の下に）が美徳だと教えられ、その為の訓練にいそしみました。そのような倫理観、価値観が、八月十五日を境に一八〇度の転換で、何をどう考え、どう対処すべきか全く解らず、右往左往の毎日でした。

オウムといい、ナチスといい、或は戦時中を顧みる時、洗脳する事が人間の行き方に、いかに大きな影響を及ぼすか、考えただけでも身震いします。

世界の食糧事情といい、宗教や民族間の争いによる生命の軽視といい、或は精神的な不安といい、何か戦中、戦後のあの右往左往した不安が、五十年を経た現在、再び忍び寄って来ているように思えるのは私一人だけでしょうか。

歴史は繰り返すとか言います。物質的には恵まれている現在の生活の中で、自戒と共に、このような繰り返しだけはしたくないし、させてはならないと思います。

追憶

中西冨志

「海底に英霊ねむる」とアナウンス聞きて合掌すバシー海峡の上
（慰霊の旅）

「海ゆかば」「南国山河」の曲流れ機内は嗚咽の声に充ちたり

観光地となりしパギオの芝草の下掘れば兵の銀歯出で来る

半年の婚を裂きたる戦なり夫果てし後の重き歳月

靖国の妻という名のきびしさに耐えし春秋われは古稀なり

父の顔を知らぬ一人子とその孫と五十回忌の夫は杳しも

「生きて来てよかった」と伊根の温泉に嫁玲子さんとゆったり話す

今年は戦後五十年。中西さんは、この度出版されました歌集「追憶」の〝あとがき〟の中に「悲惨な戦争は私等だけで十分です。現在の平和と繁栄が、夫を含め多くの犠牲の上に築かれていることを思います。この平和が守られますように―（略）―」と記されています。

長い人生の道程が深く重い抒情歌となり、また作者のいけ花の写真が、現在の安らかな生活のお歌に彩りを添えています。

川柳

宮津番傘川柳会

ああ知覧還らぬ翼思うとき　大森　美智子

彼岸花の赤たましいが揺れている

ダルマの目入れてガッツで締めくくる　田村　キヌエ

保津川のスリル魂奪われる

絵に描いた塔がだんだん遠くなる　飯沢　鳴窓

樹の蔭になるかも知れぬさくら咲く

郷里に於ける澤井市造話題（十一）

作　中西孫兵衛（先々代）

由良の歴史をさぐる会　四方寿朗

凡て何事によらず中途変更を言はるゝは困るものなるが就中公衆に対する事は猶更にて一旦発表しての後は如何ともする能はざる苦境に立つものなり去れど幸ひに両件とも首尾能く難関を切抜け実行を告げたるは大に私共の信用を維持した次第です

其二

折柄村長以下の役場員校長以下職員並に議員区長等相計り澤井君を学校へ招待し彼我談話を交へ情交を温めたしとありて其旨私より紹介せしに澤井君も承諾され忠夫粂蔵両氏随従して来校せらる宴始まるに際し澤井君の演説された大要を左に

是より一言御挨拶申上マス偖本日私共相互ニ話ノ交換ニ出席致スベク御招ニ預リマシテ出席致シテ見マスレバ美酒佳肴至レリ盡セリト言フ萬端行届キタル設備其心ヲ盡サレタル御辛労及多大ナル御厚情ニ向ツテ只管感謝スル処デアリマス又譯テ御禮申上マスルハ昨年妻ノ死亡ニ付テノ葬式デアリマスガ諸君ヨリ非常ナル御同情ヲ寄セラレ容易ナラヌ御配慮ニ預リ尚幾多ノ御手数ヲ煩ハシ御蔭ニ依リ取片付ヲ致シマシタ次第デス倩々考ヘマスルニ元来祖先代々ノ墳墓地ハ忽請ニ看過スベキモノデナイト私ハ思フノデ尤モ親モ兄弟モナク言ハバ孤独ノ哀慈ニ沈ム身デアルカラデモアリマセウガ其親ノ顔モ見知ラズ兄弟モ早ク世ヲ去リ皆ナ同ジ墓地ノ土ニ成リ果テ居リマス

カラ猶更其ノ感ヲ深クスルノデアラフト信ジマス夫故ニ矢張家内モソレニ埋メタト云フ訳デ私モ終ニハ厄介トナリ此村ノ土トナル積リデアリマス之ヲ思ヒ彼ヲ思ヘバ山河草木一トシテ愛慕ノ情ヲ起サスモノハアリマセン是蓋シ子孫ガ祖先ニ対スル最モ崇高ナル情義トシテ尊重スベキ道ト考ヘマス今回ノ帰郷モ亦タ展墓ノ爲デアリマシタガ中西氏ヲ以テ臨席セヨトノ御寵招ヲ受ケマシテ　ラズ御厚遇ニ預リマシタノハ単ニ私一身ノ光栄トスルノミナラズ草場ノ蔭ナル先祖等モ定メテ悦ビ居ルデアラフト転タ歓喜ニ耐エマセヌ

以上申上マシタ墳墓ヲ愛スルノ情ニ伴ツテ自然ニ種々ナル雅感モ起ルモノデ私ハ子供時代ノ事意外ニ郷里ノ状況ハ悉シク存ジマセヌガ一見目ニ映ズルモノハ由良ケ嶽デアル何時見テモ屹然北海ノ表ニ聳ユル雄大ナル姿ハ昔モ今モ少シモ趣ヲ異ニシマセヌ此大山高峰ヲ利用シテ何等カ労働者ノ爲メ稗益スルノ道ハナカラフカト常ニ念頭ヲ去ラヌ懸案デアリマシテ諸君ニ於テモ定メテ研究苦慮セラレツヽアラフト考ヘマスガ若シ村公共的ナリ利益増進ノ方法ノ爲メ資金ヲ要スルコトモアラバ微力ナリトイヘドモ應分ノ寄附ハ致ス考デアリマスカラ層一層郷土ノ発展向上ニ就キヌ下流人民ノ利益ヲ増進セシムル上ニ於テ更ニ一段ノ御配慮ヲ煩ハサレンコトヲ希望致シテ置キマスマダ〳〵申上タイ事モアリマスナレドモ他日ヲ期スルコトトシテ今日ハ簡単ニ御挨拶迄ニ止メ置キマス

大体の要項は如上の如し此日の前日より澤井君は藤吉氏方へ移られ居学校よりの帰りも藤吉氏宅なり翌朝訪問して再び昼食後訪問せし処如何なる用向なりけん昼食中電報来り一読せらるゝや否や蒼皇として「ヲウ今行かねば成らぬ早く俥を呼べよ」といはれ食事を急ぎ手早く衣を着換へ居らる「何処へ行くか」といへば「東京なり」と答へ私は宅に馳戻り忠夫に告げ知らせば彼も亦馳出し澤井君に會ふ曰く「汝は後より大坂に来れば可い渡台すれば四五日の時日あるべし」との事なりしも苟くも隨行者たる任務として左様にあらずとして忠夫は荷物の取片付も得せず衣類を着替ゆる暇さへなし直に出発せしが俥夫の足力の強弱に依り門戸にて忠夫の車追付き主従俥を交換して澤井君は辛ふじて発車時間に迫りたる処にて乗車せられたれども忠夫は乗後れ舞鶴に一泊翌朝発の汽車にて大坂へ登りたり此御供は只だ車を替へに行きし迄に止まれるが如きも若し君にして最初の俥なりせば空しく乗車に後れ一泊の止むなきに至りしものを後日の話に聞きたり

明治四十二年には申上べき話とてなしおはるさんの三年忌なれども親類へ代焼香を頼むとの事供養費當として御寺への御布施を込めて諸費額五拾円送り来れり是を全部其侭御寺に持参し親類客の員数を述べ此範囲にて法事を済し呉れたしと頼み是にて過不足なしとして相済

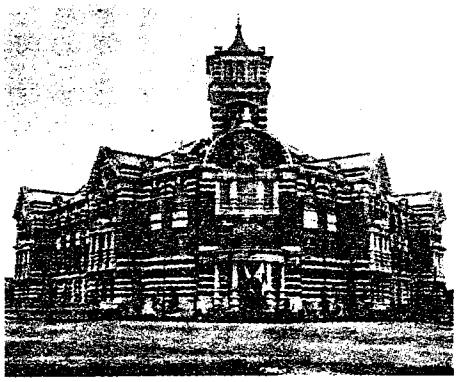
拾六

明治四拾三年三月二十八日に私は由良村より頼まれ幸澤井君大坂に滞在中と聞けば学校建築も一段落となり是が落成式を挙行したければ若し澤井氏にし出席せられなば相当の式を挙ぐべく萬一御差閊あらんか更に繰合せの出来る迄中止すべく其状況問合せの爲一坂し呉れよ書状にては其意を盡くさず面會の上多少の差障りは繰合せを願つて貰ひたしとの議にて使に参りたり同君は辞退せられしも郷里より懇望の情も察せられ豫め六日に挙式の相談を纏め帰村復命に及びました去れば郡長並に郡視学の来場も願置く必要もあり他の人々にては或は目的を達し得ざる懸

念もありとの事にて私に郡役所へ招待に行けとの事幸ひに両氏共承諾せられ宿へ引取りたる処へ電報澤井氏より来り四日に繰上げて呉れとの事にて郡長の方も其積に願へよとてありましたから又折返し出衛其旨を伝へ準備の都合もあり取急ぎ帰村せしに二日にて僅に翌三日の一日を餘すのみ此一日間に周章狼狽の程に漸く諸般の準備を了りました

明治四拾三年四月四日は学校として特筆大書すべき好箇の紀念日とす當日午前十時挙式の手筈なりしも急速なる準備とて尚欠くる所あるを免れず愈式を挙ぐるに至りしは十二時に垂々とする頃にて宴会は午後一時を過ぐるといふ有様なりき澤井君は三日の夕来村せられ学校へ出席せられしは定刻なりし其日の来賓としては前校長岡本氏丸八江東雲神崎の各村長校長と他は村の有志家百弐参拾名にて澤井君の随行員としては澤井藤吉氏なり序に賞勲局より賜りたる銀盃は郡長より伝達せられ別に郡長として賞讃の演説もありたり他事は之を省き澤井君に係る御話を致す考なれども順序として多少他事をも混合すべく之は豫め御断申置くべし元来此頃而已に限らず全篇に渉り其嫌なきを保せず幸に之を諒とせよ

休憩室に於て私が傍聴せる澤井君対山縣加佐郡長との会話の一齣に若は談話の次序曰く「我国も工学上大進歩を来せりといふが事実に於ては之を認むる能はざるを遺憾とす



文学の見える風景（七）
三島由紀夫「金閣寺」その三

中西夏江

前回にひき続き、由良の海、駅前旅館、駅等の情景描写を紹介します。当時の由良の光景や表情が、文の行間から映像となって立ち上がってくるようです。多忙な日常生活の中で、時には作品の背景となった由良を見直す機会にしたいとも思います。

P203～204　それは正しく裏日本の海だった！　私のあらゆる不幸と暗い思想の源泉、私のあらゆる醜さと力との源泉だった。海は荒れていた。波はつぎつぎとひまなく押し寄せ、今来る波と次の波との間に、なめらかな灰色の深淵をのぞかせた。暗い沖の空に累々と重なる雲は、重たさと繊細さを併せていた。（略）ここで私は自足していた。私は何ものにも脅やかされていなかった。

突然私にうかんで来た想念は、柏木（友人）が言うように、残虐な想念だったと云おうか？とまれこの想念は、突如として私の裡に生れ、先程からひらめいていた意味を啓示し、あかあかと私の内部を照らし出した。まだ私はそれを深く考えてもみず、光りに搏たれたように、その想念に搏たれているにすぎなかった。（略）その想念とは、こうであった。

『金閣を焼かなければならぬ』

日本詩人クラブの谷口謙氏は、エッセイ随筆集の中に、次のように述べています。

金閣を焼くという、この小説の主題がはじめてあかされる。

溝口の美学、つまり三島由紀夫の美意識が、荒涼たる冬の海の前で、破滅の倫理をとらえる。だが何故に由良の海が彼の論理の完成に、媒体の役目を果したのだろうか。

溝口の心中、由良の海は直に郷里の成生の海に連なっている。いや成生の海は、由良のそれより更に更に荒らかろう。丹後の辺境の貧乏寺の住職であった溝口の父の日常と、金閣寺住職道詮和尚の栄華。

古来丹後の住民は、その膏血を在京政権に搾取され続けていた。溝口の構えた姿勢のなか、案外無意識に他愛もない反抗の気持が潜んではいなかっただろうか。美への憧憬は簡単に現実への反感と結びつく。これは脆い青春の理論ともいえよう。

P206～207　そののちさらに私は歩いて、宮津線の丹後由良駅の前へ出た。東舞鶴中学校の修学旅行のときも、同じコースを辿って、この駅から帰路についたのである。駅前の自動車道路は人かげもまばらで、ここが短かい夏の殷賑をたよりに、なりわいを立てている土地だと知れた。

私は海水浴御旅館由良館という看板のある駅前の小さな宿に泊ろうと思いついた。玄関の磨硝子をあけて、案内を乞うたが答えはなかった。式台には埃がつもり、雨戸を閉めた家内は暗く、人の気配はなかった。

裏手へまわる。菊のすがれている素朴な小庭がある。高いところにしつらえた水槽がある。夏のあいだ水泳からかえった客が、体についた砂を洗いおとすためのシャワーがその水槽から下っている。

やや離れて、宿の主人の家族の住むらしい小さな家がある。閉てきった硝子戸がラジオの音を洩らしている。その徒らに高い音はうつろにきこえ、却って人がいそうに思えなかった。果してそこでも、私は二三足の下駄の散らかった玄関で、ラジオの音の隙々に声をかけては空しく待った。

背後に人影がさした。曇りがちの空から日が仄かににじんで来ていて、玄関の下駄箱の木目が明るむのに気づいたときである。

体の輪郭が融けてはみ出したように太った色白の、あるかなきかに目の細い女が私を見ていた。私は宿をたのんだ。女はついて来いとも云わずに、黙って踵を返して、旅館の玄関のほうへ向った。

――宛がわれた部屋は、二階の一角の、海の方角へ窓を展いた小間であった。女の運んできた手焙りのわずかな火気が、永いこと閉てきった部屋の空気をいぶして、その黴臭さを耐えがたいものにした。窓をあけて北風に身をさらした。海の方角では、さっきと同じように、誰に見せるともない、雲のゆったりした重々しい戯れが続いていた。雲は自然のあてどない衝動の反映でもあるかのようだった。しかも必ずその一部分には、明敏な理智の青い小さな結晶、青空の薄片が見えていた。海は見えなかった。

……私はこの窓辺で、又さきほどの想念を追いはじめた。

（略）

P209～210　三日にわたる由良館の逗留が打切られたのは、その間一歩も宿から出ない私の素振を怪しんで、内偵が連れてきた警官のおかげであった。

（略）訊問に答えて、私はありのままに、寺の生活から少しの間離れていたくて出奔したのだと言い、学生証明書も見せ、わざと警官の前で宿料もきれいに仕払った。その結果、警官は保護の態度に出た。彼はすぐさま鹿苑寺へ電話をかけて、私の申立にいつわりのないことを確かめ、これから附添って寺へ送り

由良駅前

届けると告げた。（略）

丹後由良駅で汽車を待つうちに時雨が来、屋根のない駅はたちまち濡れた。（略）

あかあかと火の熾った火鉢を囲んで談笑している駅長や若い駅員の様子に、主人公溝口は、金閣を焼かずに、寺を飛び出して、還俗して、こういうふうに生活に埋もれてしまうことも出来るのだ――とも思ったりします。

P211　……しかし忽ち、暗い力はとみがえって私をそこから連れ出した。私はやはり金閣を焼かねばならぬ。別誂えの、私特製の、未聞の生がそのときはじまるだろう。

――駅長が電話に出た。やがて鏡の前へゆき、金線の入った制帽をきちんとかぶった。咳払いをしてから、胸をそらし、式場へ出てゆくように、雨上りのプラットホームへ出て行った。やがて私の乗るべき汽車が、線路に沿うて切り立った崖に、その轟音を先立てて辷らせて来るのがきこえた。雨上りの崖土の伝えてくる鮮やかに濡れた轟音を。

今から四十年程前、有限の時間の中で、三十才の一人の文学者が真に生き生きと描写した由良自然の大景は、この作品を読む程に濃い詩情を醸し、自然と人間とのかかわりに、不変の緊張感、生命感を感じさせます。

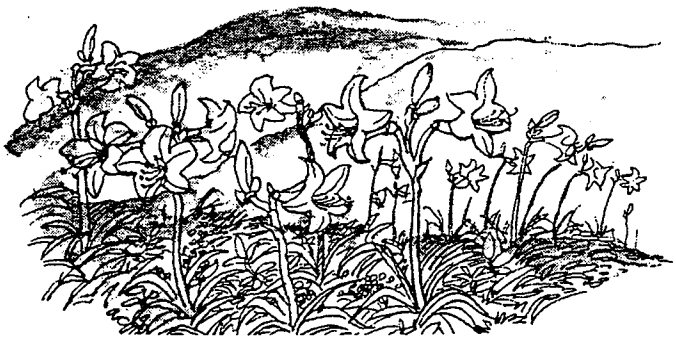
海に問い、海と作家が対話する「金閣寺」（第七、八章）は、由良にとって、永く〝有縁の一書〟となることでしょう。

編集後記

今年は、太平洋戦争終結五十年を迎えます。幾多の尊い命を代償に戦争は終り、我が国は焦土の中から立ちあがり、国民の不断の努力により、今日の繁栄と平和を手に掴むことが出来ました。

泰平の世が続き、ともすると平和の大切さ、大切にする心が薄らいできたのでないかと思われることもあり、今一度平和について、みんなで深く考えなければならない時だと思います。

公民館だよりも、今号は多くの方々のご寄稿をいただき、五十周年特集号として発刊することが出来ました。当時を回想し、平和の意義を問い質してみたいと思います。

戦陣で肉親を失われたご遺族の方々の戦後のご苦労を偲び、戦陣、戦禍で犠牲となられた多くの霊のご冥福をお祈りしつつ、平和の誓いを新たにしたいと思います。

（山下記）